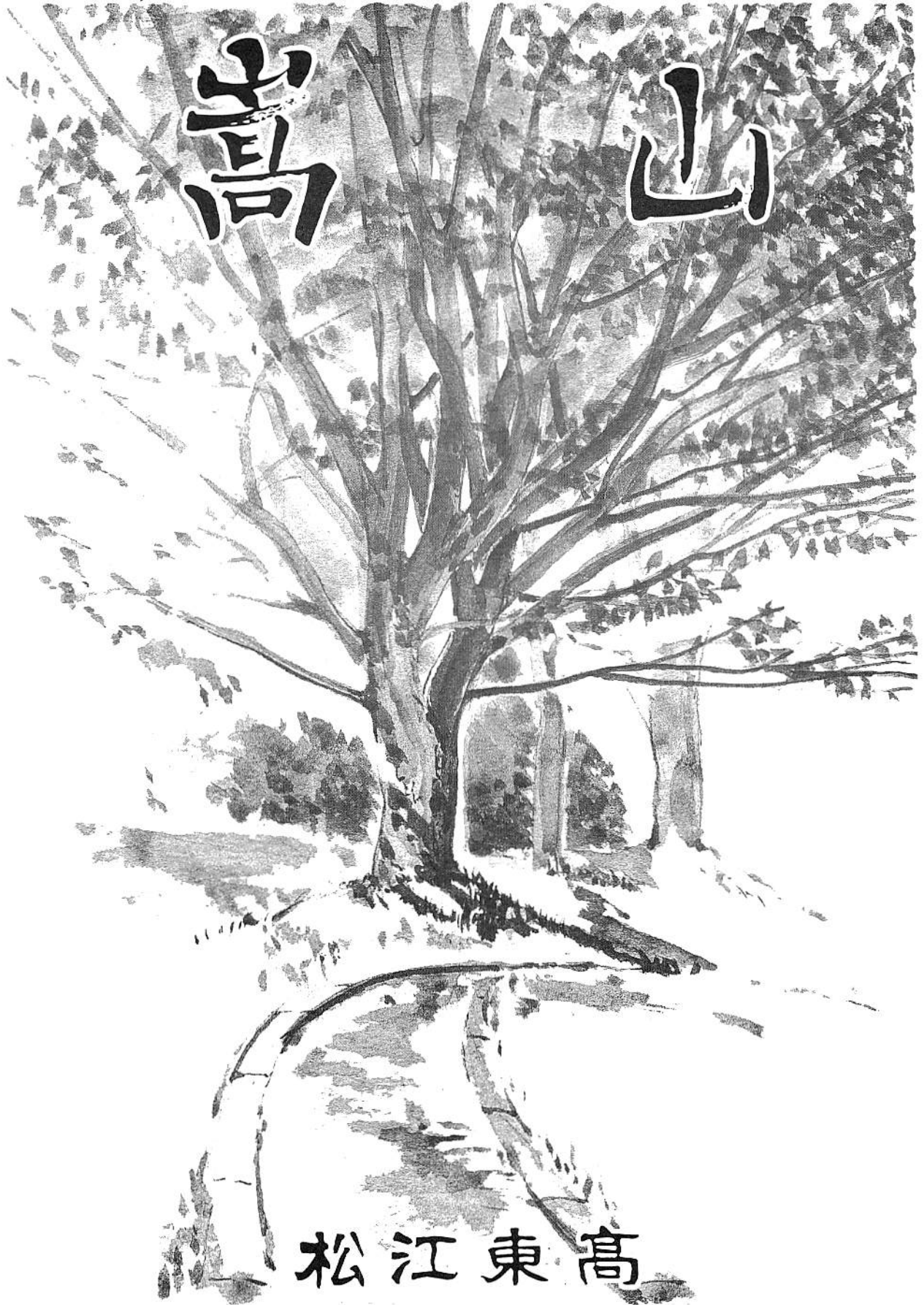


PTA 会報

No.47 2007.11



嵩山

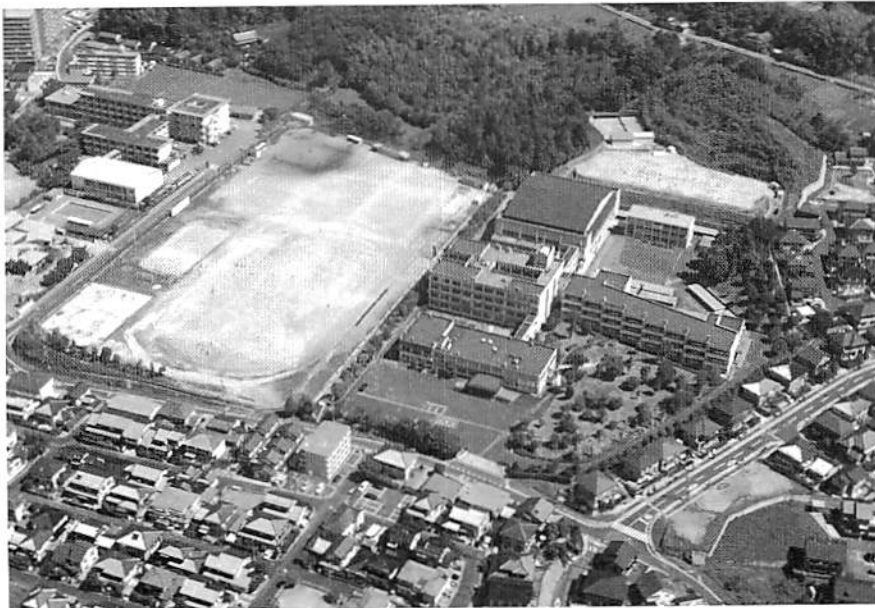
松江東高

---

## 目次

○ P T A会長挨拶	1
○ 校長挨拶	2
○ 第31回全国高校総合文化祭を終えて	4
○ 部活動報告	8
○ 新任教職員自己紹介	10
○ P T A会務報告	12
○ P T A研修委員会主催研修旅行報告	13
○ 編集後記	14

---





## 子どもの成長

PTA会長 三島 猛

私はこの度PTA会長を勤めさせていただきま  
す。二年前に副会長を引き受けてから、あつとい  
う間に時間が過ぎて責任の重圧を感じているとこ  
ろです。保護者の皆様のご意見・ご希望をPTA  
活動にいかしていきたいと思えます。校長先生は  
じめ諸先生方と、ともに連携を執り、より良い  
PTAにしていきたいと思えます。保護者の皆様  
のご支援・ご協力を、よろしく願います。

今年是全国高総文祭しませんが、ここ松江を主会  
場に七月二十九日～八月二日まで開催されました。  
開会式を見に行き、高校生が中心に開会式の準備・  
運営をして島根の良いところを全国の高校生にア  
ピール出来たと思えました。また、東雲祭の体育  
祭を見に行きました。体育祭を見に行ったのは自  
分の高校三年以来三十年ぶりのことで懐かしく思  
いました。なかでも最後の応援合戦は四つのチー  
ムとも一糸乱れず三年生を中心にチーム一丸で応  
援をしているのを見てとても嬉しく思いました。

また、野球部は夏の大会で七年ぶりに一回戦に

勝ち二回戦は優勝した開星高校に善戦しましたが  
力及ばなかつたです。でもその経験が実り、新チー  
ムで秋の大会で県内三位になり、これまた春秋通  
算して十八季ぶりに中国大会に出場することにな  
りました。岡山県の優勝チームの興譲館高校と最  
後まで善戦しましたが、惜しくも敗れました。こ  
の経験をいかしてこれからの試合にいかしてほし  
いと思えます。

八月二十三日から二十五日まで、全国高等学校  
PTA連合大会埼玉大会が開催され、PTAを代  
表して参加させて頂きました。一日目は全体会が  
あり、全国から一二〇〇〇人が集まり、文化人の  
講演や埼玉県内の高校生による発表や、アトラク  
ションを見ってきました。なかでも六校応援団連盟  
によるアトラクションは、とても息が合っていて、  
とても素晴らしくアンコールが止まらない程でし  
た。二日目は、分科会で第四分科会（家庭教育と  
PTA）に出席しました。この分科会の概要は次  
の通りありました。

いろんな機会を捉えて教員と保護者の意思疎通  
を図ることが大切だと思えます。学校から見えな  
い家庭での子どもの様子、親から見えない学校で  
の子どもの様子を情報交換することで、子どもと  
の関り方について相互に理解も深まり、どう導い  
ていくべきかについての智慧が出てくると思いま  
す。

私たちの時代と比べて、子どもを取り巻く社会  
環境も子どもの内面世界も大きく変化しています。  
子どもの現状を理解するため研修会等を通して保  
護者の知見を高めることが重要だと思えます。





## 親学を学ぶ場としてのPTA

学校長 山田 忠男

今年の六月二十八日（木）、本校の教員六名で岡山県の操山高校と倉敷青陵高校に日帰りで学校訪問に行つて来ました。操山高校は朝日高校と並び岡山県を代表する名門高校です。倉敷青陵高校は、全国の公立高校の中でも、国公立大学に現役で多くの合格者を出すことと、バスケットボール部が強いことで知られている高校です。

操山高校は、六年前から中高一貫教育を実施し、その一期生が今年高校三年生となっています。この中高一貫教育がどのような結果を出すのか、全国からの注目を集めています。様々に勉強になることがありましたが、一番印象に残ったのは、生徒が普段通行する場所に「少而学則壯而有為。壯而学則老而不衰。老而学則死而不朽。」との言葉が額に入れられ、掲げてあったことでした。この言葉は、江戸末期の儒学者で岐阜県出身の佐藤一齋が『言志晩録』の中で述べている言葉で「三学戒」と呼ばれています。六年前、前首相の小泉純一郎氏が国会で取り上げたことでも有名になりま

した。その際にも、一学生び続けることの大切さを説明するために引用された言葉です。佐藤一齋が七十歳を過ぎたときの言葉ですから、人生をしみじみと振り返った上で痛いほど感じたことを言葉にしたものなのでしょう。

最初の「少く為」までの部分は古から今日まで、学校教育の場を中心に人生の先輩達から後進へと伝え続けられてきました。中国や韓国でも、現在、国をあげて非常に強調されている言葉であると聞きます。

しかし、本当に重要なのは、それに続く部分ではないでしょうか。即ち、「壯く衰」の部分です。

その意味も込めて、少々具体的な例を挙げたいと思います。今、日本の教育の場で重要なのは「連携」だといわれています。本校においても、様々な「連携」が試みられています。SSH事業での島根大学・大阪大学との「高大連携」。また、同事業においては大きなひとつのテーマについて複数の教科で協力してプログラムを開発するなど

していますが、これも以前には見られなかった「連携」の顕著な一例といえるでしょう。また、今年度からは以前以上に「中高連携」にも取り組んでいます。特に、数学・英語等で橋渡し教材を開発できないかと研究中です。

保護者の方々と学校との連携も重要です。今、活気を帯びている本校の部活動。合唱部は先日中国地区代表として、岩手県盛岡市で開催された全国大会に出場し、見事銅賞を獲得しました。また、野球部は松江球場で開催された秋季大会において島根県代表の座を勝ち取り、十月二十八日には広島市民球場で岡山県一位校の興譲館高校と対戦し、惜しくもさよなら負けを喫したものの八対九と善戦しました。これらの晴れの舞台に、多数の保護者・卒業生の方々が駆けつけてくださいました。広島在住の卒業生に聞いたところ、本校のHPで情報を知りお越しいただいたとのことでした。この繋がりも大切な「連携」といえるものだと感じました。

八月二十四日・二十五日には第五十七回全国高等学校PTA連合大会が「夢・希望・彩り豊かに輝く明日を創造する力」をメインテーマとして埼玉県で開催され、私は三島PTA会長と参加してまいりました。ここで印象に残ったことは以下のとおりです。まず、岐阜県立関高校では、十月



に行われた生徒・保護者対象の進路説明会に、約九割もの保護者が参加しておられること。そして、高橋正夫全国高等学校PTA連合会会長の挨拶における「高等学校のPTA活動を通じて家庭教育の充実を図り、家庭、学校、地域社会との連携を深める中で、わが国、そして世界の次代を担う青少年の健全育成に保護者の方々が関わって欲しい」とのメッセージ。更に、NHKのアナウンサーでスポーツ番組や『ご近所の底力』などに出演されている堀尾正明氏の講演中での、「現在、日本国中いたるところにいろいろな問題が山積しているが、従来のように行政が、学校が、といってもなかなか解決しづらい時代になっている。そういった場面で、まさに『ご近所の底力』が発揮された場所では、問題が解決し住みやすい明るい街となっていることを感じる」との言葉。非常に示唆に富む内容でした。

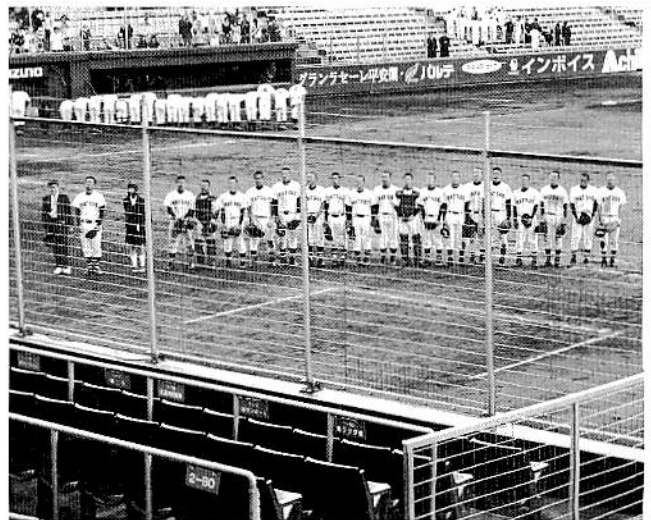
お忙しい日々をお送りのことを重々知りつつも、時に「壮にして学ばば、老にして衰えず」を思い出していただくことをお願いし、近況報告といたします。



平成19年度 全国高P 連埼玉大会



平成19年度 合唱部全国大会  
(岩手県民会館於て)



平成19年度 野球部秋季中国大会  
(広島市民球場於て)

# 《特集》第31回全国高校総合文化祭を終えて

## 第31回全国高校総合文化祭を終えて

美術・工芸部門代表委員

杉谷 俊一

美術・工芸部門は七月二十九日(日)より八月二日(木)までの五日間、高根県立美術館を主会場に開催され、全国から選ばれた三四〇校三九二点の優秀な作品が展示されました。島根県からは絵画三点、デザイン二点、工芸一点、映像一点の計七点が出品され、開催期間中の観覧者が五二〇〇人にも上るといいます。この全国大会への関心の高さが伺えるものになりました。

二十九日の開会式行事はホテル一畑の平安の間で開催され、全国からの生徒と顧問の先生で八〇〇人を超える参加の下、勇壮華麗な石見神楽上演のアトラクションから始まり、続く開会式は野津里美生徒実行委員長(本校三年生)の明快で格調高い挨拶等で厳肅に行われました。また続く宮廻正明東京芸術大学教授(松江市出身)による作品講評会と講演は、軽妙な話しぶりに加え、多彩な経験と高い造詣意識に裏付けられた感銘深いものでした。

翌三十日の交流会は同会場にて約三七〇人の参加生徒が集い、石見神楽の面をもとに県内美術部員が作った面材を使つての「ミニ面」の制作と出品作品の意見交換という二部構成で開催され、石見地区生徒による進行で和やかな雰囲気の下で終始笑い声の絶えない楽しく心温まる会となり、文字通り全国の高校生の交流の場になりました。

美術・工芸部門は計画当初から県内の美術部員のみでこの大会を運営するという主旨で、松江地区が開会式他、出雲地区が展覧会、石見地区が交流会と分担を決め、準備を進めてきました。

野津委員長の生徒実行委員会(五名)と私が委員代

表を務める美術・工芸部会(八人)とがそれぞれ本校を会場に、県推進室の助言を受けつつ会議を昨年より重ねてきました。

県内の美術部員は総勢六〇〇名余りいますが今回は一、二年生を中心に二十六校二五〇名の部員に運営委員として献身的な働きをしてもらいました。ちなみに本校からは十二名の美術部員が運営委員として参加し、また作品出品者として前述の野津里美(三年)と吉川千賀子(三年)が交流会等に参加しました。

各地区の先生方には機会を通して、礼法等をきめ細かく指導していただき、各持ち場において「笑顔」「挨拶」「身だしなみ」でもてなしができ、全国から来られた方々に感謝されたことは、部員にとつてもかけがえない体験となったことと思います。

そして、島根県立美術館の施設・設備の良さはもちろんですが、その展示内容について全国から来られた先生方に、非常に高い評価を受けたことは本当にうれしいことでした。

また、大会三日目の三十一日には秋篠宮殿下ご夫妻に今年高校生となられた真子内親王の三名をお迎えし、この展覧会をご覧いただいたのは今大会の成功とともに大きな喜びとなりました。

この大会を経験したということが一過性の出来事として終わることな



交流会の様子

く、県内高校の文化活動にどう繋げていくのか、また本校の文化部の活動にどう生かせるかを今後の課題として考えていきたいと思っています。

最後になりましたが、部会長として美術・工芸部門を温かくご指導いただいた山田忠男本校校長及び様々などところで活動しやすいように配慮いただいた本校教員の方々はこの紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

## 全国高総文祭を終えて

器楽・管弦楽部門代表委員

勝部 俊行

それは、予想以上に見事な演奏でした。

第三十一回全国高等学校総合文化祭器楽・管弦楽部門の最終日(八月一日)、プログラム最後を飾る団体として「しまねシンフォネット高校オーケストラ」が登場。曲目は、チャイコフスキーの交響曲第五番の第四楽章、あまりにも有名な大曲です。選曲したのはよいのですが、練習の過程において、本当にできるかどうか大いに危ぶまれた曲です。

ヴァイオリンにチェロ、ヴィオラにコントラバス、そして管楽器の面々、県下五つの高校による総勢一五名という大規模な合同オーケストラ、とはいっても、弦楽器のほとんどが高校に入って初めて楽器に触れ、一から始めた者たちです。長くて二年半、短くて三ヶ月という者たちの集合体です。だから先の危惧は当然予測できたことだと思います。しかしそんな周りの心配をよそに、今、大取の演奏を、目の前で彼女らは実に堂々と見事に披露してくれたのです。その彼らの努力と能力には、ただただ脱帽するしかありませんでした。

合唱や吹奏楽の世界で全国レベルにある本県ですが、音楽で他県にはあつて島根県にはないものがありました。それがオーケストラ。オーケストラは、器楽音楽の中核をなす存在です。それは音楽に幅や奥行きや広がりを感じさせてくれます。合唱や吹奏楽にない色彩を感じさせてくれるものです。そういう意味で「高校

## 第31回高等学校総合文化祭 放送部門大会回想記

放送部門実行委員 田中 求

これはあくまで一教員・一実行委員としての立場での総合文化祭回想記です。

二〇〇四年。

東高に赴任して、そして放送部を担当して二年目。放送部会そのものにも今ひとつ慣れていなかった私。ある日の放送部会で、ふっと目にした総文祭の文書。

「番組部門・会場総監督」の役の部分に自分の名前が：この瞬間が、要領悪くかつ段取りの苦手な私の、放送部門・番組会場総監督としての悪戦苦闘の日々の始まりでした。しかし、このときにはまだ、会場総監督の役割も意味も、自分が何を味わう事になるのかも、さっぱりわかってはいませんでした。

二〇〇五年夏。

あれよあれよという間に、第二十九回大会である青森大会の視察。大会のあまりのすばらしさに思いっきりへこんでしまいました。果たしてこれと同じくらい素晴らしい大会が高根で、われわれの手で、作れるのだろうか？

二〇〇五年末から二〇〇六年にかけて。

大会の全貌が見えてくるにつれ、やらなければならぬことが山ほどあることがわかってきました。準備段階で個人的に一番印象に残っているのは「仕様書作成」です。先催県で使われたものをもとに、会場で使うすべての機材の仕様書を書かねばならないのです。会社員時代も含め、ちっちゃな仕様書は何度も書いたことがあるのですが、それらとは比べ物にならない量のものでした。項目は一〇〇を超え、くにびきメッセのほとんどの場所を対象とします。マイク一本一本から巨大PA、各部屋のモニターテレビにいたるまで、カバーする領域は膨大です。名前は知っていても何のために使うのかわからない機材や規格がたくさんあるので、いろいろ調べながらの作業です。最後の最後まで、いったい何なのかすらわからない機械すらありま



交流会後の記念撮影

にオーケストラを」と訴えかけてきたのです。しかし、かつて、高根の高校に弦楽部を作ろうとしたとき、一般的に、「弦楽器は幼い頃から始めなければ上達しない」と言われていました。そして、そのことが理由のひとつで、これまで長い間、弦楽部やオーケストラ部の立ち上げが敬遠されてきたのも事実です。しかし、「弦楽器はいつからでも、誰にでも始めることができる」という先進校のアドバイスを信じ、八年前に松江東高校で勇気を持って弦楽部を立ち上げました。それをきっかけに、その後安来高校、出雲高校、益田産業高校、松江北高校とその波紋は広がり、このようにその見事な成果を披露してくれるようになったのです。そこにオーケストラ、少なくとも弦楽の高校での定着を強く感じ、そしてこの総文祭の演奏から、これからの発展を予感させてくれたことに、まさに感慨ひとしおの思いです。

チャイコフスキー交響曲第五番第四楽章。荘重な中に優美さと甘さと何となくノスタルジックな序奏のはじめから、演奏中幾度となく熱いものがこみ上げてくるのを禁じることが出来なかったのは、果たして私だけだったのでしょうか。

した。会場のくにびきメッセのこともよく知っておかなければなりませんので、何度も足を運ぶもの、さまざまな催し物が行われている場所であるため、自由に見学できる日程も限られており、また本業もあり私自身見学の時間がいつでも取れるわけでなく、さらに実際のところは機材一つ一つの規格や相性問題もあるために、業者が機材を入れて設営が完了するまでどんな不具合があるかわからない箇所がたくさんありました。そんな状態ですから相互の項目に矛盾があってもなかなか気づきません。これについては、業者説明会（こゝまで一教員がやるとは思っていませんでした！）

のあと、いろいろな齟齬があり、仕様書がらみのトラブルは仕込み終了まで絶えることはありませんでした。何かが起こるたびに、「大会不成立となるようなとんでもないトラブルでありませぬように！！」と祈るような気持ちで胃痛をこらえた日々が思い出されます。そうこうするうちに第三十回大会の京都大会も終わっていました。

二〇〇七年。大会一ヶ月半前まで、会場レイアウトおよび進行台本を完成にもっていきできなかったことは、今思い出しても恐怖です。会場監督としてあってはならぬ失態です。他にも、いつの間にか私が担当になっていた、閉会式後の生徒全員による、詩の群読。読み指導が私ほど下手な放送部顧問はいないでしょうに、なぜ？と思いつつ、これまた一〇〇人超の生徒が実際に一堂に会する機会は少なく、会場で実際に全員リハーサルができるのは数時間とあって、前日になるまで成功するのか失敗するのか、狙っている効果は出るのか、などなど心配以外何もできない状態で不安な日々を過ごしました。もう一つとどめを刺されたのが、全国から送られてくる画像ファイルの調整：コンピュータで投影する静止画のサイズが、私自身の連絡文書の書き方のまずさから、うまく投影出来ないサイズで次々と



送られてきました。一五〇枚程度の画像をチェックし、そのうち数百枚ものデジタルデータを手作業で修正していきながら、「出来る事なら逃げ出したい」と半分以上本気で考えていました。休日などに会場・くびきメッセの近くを通る度に、さりげなくルートを変え建物を視界にいれないようにしていたのはこのころです。

今冷静に振り返ってみると、これらすべての仕事は、専門でこれにかりつきりなら何という事はなく出来てしまうものであると思います。しかし、平素の業務との両立は至難の業でした。自分自身、一番の仕事は英語教員としてのそれであると思うだけに、壁に頭を打ち付けたくなるほどに歯がゆい思いをせざるを得なかった事がこの期間中何度もありました。本校にも二人いらっしやる各部門の代表委員の先生方の労苦は筆舌に尽くしがたいものがあつたと思いますし、県内あちこちに私と同じように「逃亡できたらし」と夢想しながら仕事と向き合っていた先生方が居られたのでしよう。また、本大会業務を専門にされていたとはいえず、実に少ない人数で膨大な業務を回して居られた推進室の皆さんの労苦も察するに余りあります。実行委員会をはじめとする生徒たちも、何かと苦勞の連続だったことでしょう。

もつとも、ただ徒に大変で苦痛な業務だったというつもりは毛頭ありません。準備段階から生徒の秘めたる可能性が見えてくるにつれ、不安はかすかな希望へ変わっていききました。また、今まであまり知らなかった専門部の先生方の素の表情に触れ、次第に放送部門そのものの団結力も高まってゆきました。なにより、自分自身、大きな現場を仕切るという貴重な体験をさせていただいたことは大変感謝しております。

本番は、各メディアの報道どおり、すばらしい大成功に終わりました。あれほど心配していた詩の群読も、終わってみればすばらしいものだったと各県の参加者からあたたかい言葉をいただきました。ただただ生徒たちの持っている能力と、ひたむきな取り組みに心打たれ、本番終了直後に会場の扉を閉めて振り返ったときの彼らの表情に思わず目頭が熱くなったものです。

この大会経験が放送部門をいやはやあらゆる文化部の活動を末永く発展させていってくださることを願っています。何かと目立たないとされる文化部の活動。どの学校でも、全校を挙げての応援体制が運動部ほど整っているわけではありません。また、04総体に比べて今回の大会が予算的・人目的にあまりにも厳しい大会であったことも否めません。しかし、本大会での生徒の献身的な取り組みを思い出すたび、なんと少しでもわれわれが、この文化部活動を盛り上げていかねば、と思う次第なのです。

器楽・管弦楽部門生徒実行委員長

31R 井 土 葵

今年、二〇〇七年という年は私にとっても、また島根に住む多くの人にとって忘れられない年になったと思います。それはここ島根県で全国高等学校総合文化祭が行われたからです。八年前から島根で行われることが決まっていた総文祭。二年前に私が弦楽部に入ろうと決めていた頃は「三年生になった時は総文祭があるんだなあ。」程度にしか考えておらず、総文祭といつてもそんなに大変なことではないだろうというのが最初の気持ちでした。しかし二年生になり、しまねシンフォネット高校オーケストラとしての活動が始まった時から徐々に総文祭に対しての意識が強まっていったと思います。

総文祭本番までに何度かオーケストラとしての演奏があり、その度に他校の方と合同で演奏をしました。少ない合同練習の中で一回一回悪いところを直していく、本番に向けて毎日練習を頑張りました。本番では「白鳥の湖」「くるみ割り人形」などチャイコフスキーの曲が多かったです。そして、今回総文祭の器楽・管弦楽部門で演奏すると決まったのもチャイコフスキーの曲でした。曲名は「交響曲第五番・第四楽章」。第四楽章だけでも一〇分を超える、とても長い曲です。私が初めてこの曲を楽譜で見たとき、正直「無理だ……」と思いました。今まで見たこともないようなリズムと音域と楽譜の量。実際にCDでこの曲を聴いてみても、

とても早く楽譜を目で追うことができませんでした。私を始め、東高の弦楽部では特に、高校生になってから弦楽器を始めた人が多いので、基礎や簡単な曲をやるだけで精一杯の状態でした。なので部員みんなも「できるわけない」と言っていました。しかしできるわけないと口に出していても、この曲を弾きたいと思う気持ちは強くあつたので、毎日少しずつですが、できないところをできるようにし、一生懸命練習をしました。

その結果、最初は無理だと思っていたこの曲も毎日の個人練習や、合同練習を重ねる毎に早いテンポにも慣れていき、やっと曲を通すことができるようになりました。本番が近づくとつれて、日に日に合同練習の回数も増え、本番の一ヶ月前からは土・日の休みはなく毎週合同練習をしました。本当にこの一ヶ月間は体力的にも精神的にもとても疲れました。

そして本番の8/1、私たちしまねシンフォネット高校オーケストラは器楽・管弦楽部門のとりとして最後のステージに立ちました。本番では緊張ももちろんありましたが、緊張と同時にこれで最後なんだという寂しさもありました。しかし、終わった今考えてみると、最後の演奏はとても楽しかったように思います。長い曲で、しかも高校生になってから弦楽を始めた人の多い私たちが、ここまで完成した演奏ができたことは本当にすごいことだと思えます。弦楽器は難しいですが、だともよく言われますし、実際にとても難しいですが、音楽が好きで、もつともっと上手になりたいという気持ちさえあればいくらでも上手になるし、人を感動させる演奏が本当にできるんだと強く感じました。しかし、人を感動させる演奏をするには、一人だけの力では無理で、多くの仲間や先生方、身の回りで様々な面を支えて下さった方がいるからだと思えます。

総文祭が無事成功したのも、総文祭に関わったすべての人の協力があつたからだと思えます。今年には本当に辛いこと、楽しいこと、悲しいこと、感動したことなどたくさんありましたが、すべて心に残るいい思い出です。生徒実行委員長としてやってきて良かったと思います。



## 35 R 野津里美

全国高総文祭が終わって早くも二ヶ月以上経ってしまいました。時間が過ぎるのが早すぎて何だか昨日まで高総文祭に参加していたような気がしますが、それと同時に、あのにぎやかで慌ただしかった空気の中に自分がいたのは遠い昔のことのようにも感じられ、何とも不思議な気持ちでいます。七月の終わりから八月の初めにかけて行われた高総文祭美術・工芸部門では、全国から選ばれた人たちが自らの作品と一緒に島根県に集いました。高総文祭ではさまざまな出来事がありました。その中で特に強く印象に残っていることを中心に書かせていただこうと思います。高総文祭の一年前、私を含めた五人の生徒実行委員と各学校の先生方が東高の視聴覚室で初めて顔を合わせ、会議をしました。初めはまだ大会に対するイメージが全然湧かず、前年度の大会の様子を映したビデオを見せていただいた時も、壇上に登り挨拶をしているビデオの人が来年の私自身の姿だという実感があまり持てませんでした。そんな高総文祭へのイメージが急に現実味を帯びるようになったのは、その年の夏、高総文祭の京都大会に視察生徒として参加させていただいた時です。夏真っ盛りの京都を歩いて会場に着いた私は、広い会場や人の多さ、そしてなんといっても作品の圧倒的な存在感に驚きました。私には開会式で少し挨拶をするという役割があつたので壇上の席に座っていたのですが、傍目には分からないものの極度に緊張して胃が痛くなっていました。司会の挨拶が始まり、開会の言葉が始まり、京都大会の生徒実行委員長の挨拶が始まったとき、会場のみなが見ているその先に、何も見ずに堂々と語りかけるように話す委員長の姿がありました。それを見て、自分が担う「生徒実行委員長」という役割の重要性に改めて気づかされました。その後、島根に戻ってからも何回か会議を重ね、次第に委員同士や先生たちともよく話し合うようになってきました。私たち生徒同士の話し合いで大きな物事は遂に決定することはできませんでしたが、大会で役員が着るTシャツのデザインなど、細かいことを決めるこ

とができました。また、島根県中の美術部が協力して、全国から集まる作品の出品者が交流会で製作する神楽面の型を和紙で作ったり、交流会のリハーサルをしたりと大会に備えました。

私自身は昨年の京都大会での生徒実行委員長の挨拶を思い出し、実行委員長として、とにかくいいスタートが切れるように、ひたすら暗唱の練習を重ねました。そして高総文祭の初日、全国から来てくださった皆さんの前で、私は昨年の京都の夏よりもずっと穏やかな気持ちで本番を迎えることができました。挨拶が終わったときに生まれた安堵感や充実感の混ざった何とも言い表せない気持ち、そして皆さんが下さった拍手の音、これが私の高総文祭の記憶の中で最も鮮やかに思い出すことのできるものです。その後も色々なことがあり、失敗などもして、その度に自分の未熟さを思い知り、反省したりしましたが、それも全て含め、運営する側として高総文祭に参加させていただいて本当に良かったと思います。高総文祭に関わらなかった自分というのは今では想像できないし、何よりたくさんの人と出会い様々な経験をしたことによって自分自身が成長できたと思います。今まで私の周りにいて支えてくれた人々、そして高総文祭で出会った皆さん、本当にありがとうございました。

## 小倉百人一首かるた部門出場(読手)

## 37 R 飯塚梨紗

私は全国総合文化祭小倉百人一首かるた部門に読手として出場しました。これは、各県対抗で戦う捕り手部門と平行して全国で選ばれた三名の優秀読み手の中から、最優秀読手を一人決める大会です。この大会を通して感じたことなどを書いてみたいと思います。

私は高校一年生の冬「読手をやってみない？」というかるたの先生のことばがきっかけで読手を始めました。私にとって総文祭出場のチャンスは島根大会の一度だけ。地元開催の総文祭出場なんてめったに無いこと。頑張って練習して絶対に出場してやろうと思いました。

しかし、いざやってみると読手というのはとても大

変なものでした。上の句は五秒台、下の句は四秒台、余韻は三秒、間は一秒。少しでも最初の文字の発音を間違えると試合が成立しなくなる。しかも一試合一時間、約百首も詠むので詠み終わると声はガラガラになる。ただ大きな声で詠めばいいというものではなく、選手が捕りやすい詠みをしなければなりません。読手をはじめから一年間、特にテープ審査締め切り一ヶ月前は家でかなりの練習をしました。近所迷惑になりながらも、グラントワで詠みたいというただそれだけの思いで頑張りました。出場が決まったときはとても嬉しかったです。

出場が決まってから六ヶ月間は瞬く間に過ぎていきました。あつという間に七月二十九日、総文祭本番です。三百畳の畳が敷かれたグラントワ大ホール。予想以上の迫力でした。試合の前日に行われた抽選会により、私は第一試合を詠むことになりました。とても緊張しました。私はその時のことをよく覚えていません。いつの間にか試合が始まって、いつの間にか終わった感じ。あまり実力を出せなかったような気もします。しかし、夢にみたグラントワで詠めたことで、終わった後は充実感でいっぱいでした。結局、最優秀賞は獲れませんでした。総文祭を通して頑張ることの大切さを改めて実感することができました。

さらに、もう一つこの総文祭を通して、私はいかに周りの人に支えられて、日々過ごしているかということも分かりました。わたしの他に選ばれた二選手の読手。三人でお互いを励ましあい、互いの県のことを話したりして、敵回上で初対面なのに、仲良く助け合うことができました。また、かるた教室の先生達。私に一から読み方を教えていただき、ダメ出しもたくさんしてくださいました。そして、東高の皆さん。部活が無いのに出場させていただきました。廊下ですれ違ったとき、休み時間など多くの先生方や友達が「頑張つてね」と声をかけてくださいました。周りの人からの声援がこんなに力になるとは思いませんでした。本当に嬉しかったです。

総文祭を通して、私は大きく成長することができました。皆さん本当にありがとうございました。

# 平成19年度(第45回)県高校総体結果一覽

松江東高校

本年度(昨年度)

本年度(昨年度)

男子総合 得点59点(71点) 順位12位(5位)  
 女子総合 得点53点(73点) 順位6位(5位)  
 男女総合 得点112点(144点) 順位7位(5位)

## 【各部結果】

### ☆陸上競技部

男子走高跳 決勝進出 三和 健太  
 女子やり投 決勝進出 山田 佳苗

### ☆剣道部

男子団体  
 一回戦 対出雲工 3-2で勝ち  
 二回戦 対大社 0-5で負け  
 女子団体  
 一回戦 対三刀屋 0-4で負け

男子個人 森脇卓、森脇直、津森、浜田、佐川、福山  
 全員3回戦までで敗退  
 女子個人 畠山・渡部 二回戦敗退

### ☆柔道部

男子団体 松江東 2-3 益田東  
 松江東 2-3 津和野

ベスト8 日高 巳恵

### ☆弓道部

男子個人 60kg級 ベスト8 豊島 創太  
 73kg級 ベスト8 豊島 隆太  
 男子団体 5位  
 女子団体 予選敗退

個人戦 板倉駿介・川添貴一・坂本太智・長澤 純・中谷治規・早弓沙希  
 (3回戦進出)

### ☆サッカー部

男子7点

一回戦 3-1 江津工  
 二回戦 2-0 出雲工  
 準々決勝 0-7 立正大浜南(ベスト8)

### ☆アーチェリー部

男子14点

男子団体 優勝  
 女子団体 優勝  
 男子個人 1位 福村 翔平  
 2位 小川 直紀  
 女子個人 1位 高橋 由加  
 2位 中島ちひろ  
 3位 杉谷 文香

平成19年度インターハイ(佐賀県開催)  
 男子団体45位 女子団体45位

### ☆バレーボール部

男子 一回戦 0-2 松江商  
 女子 一回戦 2-0 川本・島根中央  
 二回戦 0-2 出雲

### ☆水泳部

男子400M自由形 1位 徳島 洋  
 男子800M自由形 1位 徳島 洋  
 男子400Mメドレーリレー 8位 徳島・栞谷・加藤・三代  
 男子400Mフリーリレー 8位 徳島・加藤・栞谷・三代  
 男子800Mフリーリレー 6位 徳島・加藤・栞谷・三代

### ☆バドミントン部

女子8点

男子シングルス  
 ベスト32 竹谷 貴裕  
 男子ダブルス  
 ベスト32 竹谷貴裕・井上真一郎組  
 長岡純平・岩田 航組

女子学校対抗戦  
 一回戦 松江東 3-1 出雲  
 二回戦 松江東 1-3 松江商(ベスト8)  
 女子シングルス  
 ベスト32 義田彩華

女子ダブルス  
 ベスト16 義田彩華・中谷祥子組  
 ベスト32 三成美穂・中山澄香組  
 常松沙織・永瀬由貴組

☆テニス部

女5点

男子団体 二回戦 益田工に敗退(ベスト16)  
女子団体 一回戦 2-1 隠岐水  
二回戦 2-1 出雲北陵  
三回戦 0-2 松江北(ベスト8)

男子シングルス

ベスト16 松本 亨甫(中国大会出場権獲得)

女子シングルス

ベスト16 糸原 陽子(中国大会出場権獲得)

ベスト32 青戸 海里・長瀬 知佳

☆ボート部

男子 舵手付きクオドルプル 2位

井川・田原・本間・瀬尾・作野

女子 舵手付きクオドルプル 2位

柿田・林・平塚・内田・三島

☆ソフトテニス部

男子団体 一回戦 2-0 平田

二回戦 0-3 松江工

女子団体 一回戦 2-1 吉賀

二回戦 1-2 安来

男子個人

遠所健太郎・田辺敬明組 三回戦敗退

柏原大二・荒木 駿組 二回戦敗退

荒川 崇・井上貴大組 二回戦敗退

杉原宏太・福岡成二組 一回戦敗退

山本壮太・石川翔太組 一回戦敗退

女子個人

野田麻弥・野津なるみ組 三回戦敗退

足立佳織・足立貴美組 二回戦敗退

武田愛・吉儀まなみ組 二回戦敗退

木幡祥子・金山友香組 一回戦敗退

☆卓球部

女16点

男子団体 二回戦 0-3 出雲工

女子団体 二回戦 3-2 大田

三回戦 3-1 松江商

準決勝 0-3 明誠(3位)

個人

ダブルス ベスト8 前田・坂本組

シングルス ベスト16 高野・宮本組

ベスト32 高野 涼子

ベスト32 前田絵里佳 宮本早希

☆バスケット部

男26点・女24点

男子 優勝(6年連続10回目)

二回戦 112-51 益田工翔

三回戦 113-50 松江西

四回戦 74-52 松江高専

準決勝 89-46 出雲

決勝 72-59 松江南

ベスト5賞 村上 逸人・野田 恭佑

女子 優勝(3年ぶり2回目)

二回戦 81-35 三刀屋

三回戦 91-49 明誠

準決勝 76-55 出雲商

決勝 58-53 松江商

ベスト5賞 沼田彩花・神田茉由子

平成19年度インターハイ(佐賀県開催)

男子 一回戦 76-83 盛岡市立(岩手)

女子 一回戦 62-68 奈良文化(奈良)

☆ハンドボール部

男6点

男子 3位

一回戦 23-8 浜田水

準決勝 13-24 松江高専

3位決定戦 16-14 松江南

女子(同好会) 4位

一回戦 12-10 浜田商(公式戦初勝利)

準決勝 1-43 松江女

3位決定戦 3-17 江津

☆野球部

平成19年度松江地区高等学校野球大会

一回戦 11-1 情報科学

二回戦 8-11 開星

第89回全国高等学校野球選手権大会

一回戦 4-0 江津工

二回戦 0-4 開星

平成19年度島根県高等学校秋季野球大会兼

第109回秋季中国地区高等学校野球大会島根県予選

一回戦 8-0 松江工

二回戦 13-4 出雲

三回戦 10-1 飯南

準々決勝 8-6 安来

準決勝 2-3 松江南

3位決定戦 5-4 瀬摩

第109回秋季中国地区高等学校野球大会  
一回戦 8-9 興譲館(岡山)

# 新任教職員

## 自己紹介



国語 11R 副担任

文芸・卓球

田中耕一

今春、松江東高校へ赴任しました田中耕一です。東高では、先生方がたいへん時間を大切にしておられるという目を当たりにしました。授業開始のチャイムの鳴る前に教壇に立って授業開始に備えておられる先生と、それを当然のことと受けとめている生徒の皆さんを見て、授業の一分一分が貴重なものであることを改めて痛感しました。勉強することはたいへんなことです。それを三年間続けることはさらにたいへんなことです。一日の重さを受けとめながら、生徒の皆さんが自分を伸ばしていけるように、生徒の皆さんとともに歩んでゆきたいと思えます。どうかよろしくお願ひします。



国語 15R 担任

卓球

持田綾子

この度の異動で、矢上高校から参りました。田舎での暮らしが長かったので、街に慣れるのに苦労しそうです。

赴任して早々、一年生の担任を拝命し、わからないことが多い状態で、毎日が全力疾走といった状態です。しかし、授業中、生徒が楽しそうな笑顔をを見せてくれると、「よし、頑張つて突っ走ろう」と思います。

これから、よろしくお願ひします。



国語 3年学年付

女子バドミントン・新聞

山根真弓

松江北高校から来ました。受験生を担当していますので、毎日が緊張の連続です。

私は東高出身ではありませんが、東高とは不思議な縁があります。高校時代、バドミントンのインターハイ予選が東高体育館で行われ、応援に来たことがあります。それから十年後の今、私は女子バドミントン部の顧問をしています。運命という言い過ぎですが、東高と出会えた縁を大切にしたいと思ひます。

東高の生徒は皆、真っ直ぐで綺麗な瞳を持っています。その瞳に応えるために精一杯頑張りますので、保護者の皆様、よろしくお願ひいたします。



地歴・公民 1年学年主任

剣道・新聞

佐々木 茂

今春四月の人事異動で、大社高校から松江東高校に赴任しました。教科は地歴・公民科です。松江での勤務は三年ぶりです。旧松江市内で三校目の普通高校勤務となります。

くにびき国体が開かれた昭和五十七年四月に横田高校から松江地区に転勤し、松江市内で二十二年間勤務しました。この間に松江東高校が開校し、野球部の甲子園出場について兄弟校勤務者として大会出場の寄付もし応援したのを記憶しています。

閑静で緑豊かな校地、広い廊下、そしてノコギリ状に配置されている教室など印象深い校舎や、非常に軽快で爽やかなメロデーにのって「朝のめぐみ 創造の 自然の論し 今新た：：：若き生命の躍るかな いざや 進まんともがらよ」と斉唱される素敵な校歌をもつ東高で、生徒たちのために、精一杯勤務させていただきます。



地歴・公民 2年学年付

ボート

中村 怜詞

昨年まで島根大学大学院で研究活動をしておりました。教壇に立つのは初めてのことです。教師



を志したのは浪人生の時でした。あれから7年が経ち、ようやく自己実現の一步目を踏み出せたところですが、東高生活が始まって半年が経ちました。最初の一月目は戸惑うことが多くありました。一番印象に残っているのは、「生徒が授業中に寝ない」ということです。自分の高校時代と比べて、はるかに授業に臨む姿勢が優れている。これには良い意味でショックを受けました。今の生徒の良さを大事にしていきたいなと思った瞬間でした。そのためにも、「日々の授業は全力で!!」と思っております。

世界史の授業を通して生徒の知的好奇心を刺激し、学ぶことの面白さを伝えていきたいと思えます。まだまだ未熟ゆえ、日々勉強あるのみです。御指導・御鞭撻のほどよろしく願います。



数学 22R担任  
吹奏楽・弦楽・テニス  
原 田 正

この春、邇摩高校から赴任いたしました。私自身は益田市の出身で、新規採用から10年間西部の学校で勤務しておりました。初の松江市勤務となり、文化や気質、学校の性格や部活動など、生活スタイルが180度変わってしまいました。そのことに戸惑いつつも何とか半年間やってきました。東高は大変穏やかな生徒が多く、つついそのペースに乗せられております。大変忙しい学校ですが、その中に流れる穏やかな空気・時間を大切に生

活していきたいと思えます。これからもよろしく願います。



実習教員(理科) 3年学年付  
生物  
景 山 由美子

この春から理科の実習教員として勤めさせていただきます。東高勤務以前は、保育園で栄養士として勤めていましたので、高等学校での勤務は3年ぶりになります。当初は不安もありましたが、優しい先生方と元気な生徒さんたちに囲まれて、とても楽しく充実した日々を送っています。理科の実験・実習・清掃時などを通して、たくさん生徒さんと出会うことをうれしく思っています。若いパワーをいただきながら、生徒さんとともに成長できるよう頑張っていきたいと思っています。よろしく願います。



保健体育 3年学年付  
剣道  
松 浦 辰 彦

横田高校から赴任してきました。教員生活三十三年目になりました。福岡出身です。もう少し早く松江の高校に帰りたいのですが、ようやく念願が叶いました。我が子3人が東高でお世話になり、恩返しのため参りました。

分掌の関係で、みんなの前で話す機会がたくさんあり、剣道で学んだことを元に、いろんな話をしたいと思っています。合わせて、東高でも剣道部を強くしたいと思っています。人は皆、強くなることにより自分に自信を持ち、自信を持つことにより人にも優しくなれる。「そんないい関係をみんなで作っていきたくらいなあ」と思っています。



事務 企画幹  
伊 藤 津名男

松江養護学校から赴任して来ました。これまで商業高校、ろう学校、養護学校を経験しました。ここでは、希望する学校に進学したり会社に就職するため生徒の皆さんや教職員が本当に頑張っておられる様子を見てきました。B4判の更紙や印刷用インクなどは、買っても買ってもすぐ無くなるので、いつも注意して不足しないようにしています。また、学校も古くなるにつれて突然に修繕が必要となることもあり、変化に富む仕事をさせていただいています。少しでも皆さんのお役に立つことが出来ればと思っていますのでよろしく願います。

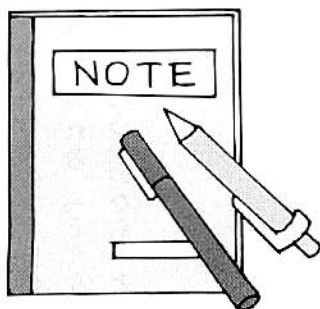


# P T A 会務報告

平成十九年度 平成十九年 四月 一日から  
十月三十一日まで

（十月三十一日まで）

- 一、平成19年度 P T A 関係会長会（4 / 3）
- 二、平成19年度第1回 P T A 常任理事会（5 / 6）
- 三、平成19年度 P T A 役員引継ぎ・第1回役員会・総会・生徒活動後援会・学年 P T A（5 / 12）
- 総会議事
  - (1) 平成18年度会務報告
  - (2) 平成18年度学校徴収金諸会計決算
    - ① P T A
    - ② 記念事業
    - ③ 施設充実費
    - ④ 進路指導費
    - ⑤ 生徒会
    - ⑥ 部活動振興費・学級費
- (3) 平成19年度 P T A 役員選出
- (4) 新旧役員挨拶
- (5) 平成19年度事業計画
- (6) 平成19年度学校徴収金諸会計予算  
総会報告
  - (1) 平成18年度末松江東高校人事異動
  - (2) 教育方針・教育目標
  - (3) 平成19年度校務分掌・学年の重点目標
  - (4) 校務分掌等教員配置
  - (5) 学級担任
- (7) スーパーサイエンス事業  
生徒活動後援会総会議事
  - (1) 平成18年度生徒活動後援会会計決算
  - (2) 平成19年度生徒活動後援会役員選出
  - (3) 新旧役員挨拶
  - (4) 平成19年度生徒活動後援会会計予算
- 四、P T A 進路指導委員会（5 / 12）
- 五、第1回評議委員会・安全互助理事会（5 / 19）
- 六、平成19年度県高 P 連総会（6 / 9）
- 七、第1回保護者面談（全学年）（6 / 11、13）
- 八、平成19年度第2回 P T A 役員会・生徒指導委員会・研修委員会・広報委員会（6 / 23）
  - (1) 学校近況報告
  - (2) 本年度の P T A の活動について
  - (3) 意見交換
- 九、第49回中四国高校 P T A 連合会大会  
香川大会（7 / 13）
- 十、平成19年度 P T A 各地区支部総会  
城東・川津、西津田（7 / 20）  
安来（7 / 21）  
東津田、朝酌（7 / 23）  
竹矢、鳥根野波、隠岐（7 / 24）  
持田、美保関（7 / 25）  
本庄、八束（7 / 26）
- (1) 学校近況報告
- (2) 人権同和教育
- (3) 意見交換
- (4) 学年別懇談
- (5) 次年度役員選出
- 十一、第57回全国高校 P T A 連合会大会  
埼玉大会（8 / 24、25）
- 十二、平成19年度ガーデニング講習会（8 / 25）
- 十三、東雲祭 文化の部（8 / 30、31）  
ガーデニング作品展示
- 十四、平成19年度第2回高 P 連評議委員会  
安全互助会理事会（9 / 8）
- 十五、P T A 研修旅行（10 / 17）  
スーパーサイエンスクラス  
大阪大学実験講座見学等
- 十六、第2回保護者面談（3年）（10 / 23、26）



# PTA研修委員会主催 研修旅行報告

【参加者】 1年生保護者 1名  
2年生保護者 9名  
3年生保護者 4名 教員 4名

【旅程】 10月17日（水曜日）

7：00 東高発（貸切バス）  
11：30～12：05

島根県育英会大阪学生会館（寮）見学  
13：30～15：30

スーパースサイエンスクラス大阪大学  
20：00 東高着  
大学院実験講座見学

## 【研修の様子】

### (1) 島根県育英会大阪学生会寮訪問・見学

JR吹田駅から徒歩15分、高い山の上にある大阪学生会寮を訪問しました。舎監の福田浩三ご夫妻に、寮内を案内していただきました。食堂・風呂場・自習室、どこもピカピカに掃除



福田さんによる学生寮の概要説明

### (2) 大阪大学大学院工学研究科訪問

最初に訪れたのは、知能機能創成工学専攻浅田研究室。浅田研究室は、ヒトの動きを模倣したヒューマノイドロボットの研究開発で有名です。研究室は、地下1階にあり、



二足歩行ロボットのモーション制御実習に取り組む生徒たち



施設見学（整った食堂の様子）

言葉の端々に学生寮生活の快適さを感じ取ることができました。

東高卒業生Y君（大阪芸大4回生）からは、近況報告がありました。

指導が徹底していることがよくわかりました。

が行き届き、大変管理の行き届いた様子に、驚きました。学生さんたちが、丁寧に施設を使用しておられること、福田様のご指導致が徹底していることがよくわかりました。

「親が来ると、おなか痛くなるとか、学生さんが言っただけです。」と、茶谷先生。でも、我が子とのツーショット写真撮影に忙しいお母さん。ほほえましい光景とともに、和やかな雰囲気の中、実験が進みました。

次に訪れたのは、応用化学科分子創成科学専攻茶谷研究室。茶谷先生から、工学部に進学する学生に求められること、卒業生の進路について、説明がありました。「実験室に入室する際に、ゴーグル着用が義務づけられています。」との指示に、ちよつと緊張して研究室に入りました。研究室は、所狭しと実験器具が並び、生徒4名は、難しそうな薬品を用いた有機化学合成実験に取り組んでいました。



保護者の質問に対して熱心に説明する茶谷先生

天井がガラス張り、1階フロアから実験室の全貌を見ることが出来る作りに、一同唖然。ロボカップに用いるサッカークートを模したフロアの中央に机を並べ、ロボット制御の実習に取り組む生徒6人は、真剣に、楽しそうに作業を進めていました。

最後に訪れた環境・エネルギー工学専攻 山口研究室では、まず、黒崎健先生から、学科の構成について説明をいただきました。続いて、黒崎先生ご自身の研究内容を、演示実験によって、

わかりやすく解説していただきました。わずかな温度差を起電力に変換する素材、手のひらを当てただけで、モーターが回転するほどのエネルギーが生み出されることに、驚かされました。

山口先生は、松江市出身の研究者。郷土出身の研究者が、直接生徒を指導してくださることを、とても心強く感じました。

整然とコンピュータが置かれた実習室で、生徒3人が自分の勉強部屋レイアウトをディスプレイ上に立体表示し、クーラーを設置したり、窓から



生徒の作業を見つめる山口先生



熱電変換素子を演示する黒崎先生

日差しが差し込んだときに、部屋の温度分布がどのようになるかをシミュレートする実習に取り組んでいました。

13時間の大変充実した研修となりました。親元を離れ、子供たちは大学で何を学び、どう成長していくのかを想像することができた、貴重な研修でした。

準備に当たられたPTA研修委員の皆様、研修にご参加いただいた皆様、そして、ご指導いただいた皆様に、感謝申し上げます。

(文責 総務部 泉)



研修に参加した保護者の皆様 山口先生(後列中央)を囲んで

## 編集後記

PTA会報「嵩山」第四十七号を皆様にお届けします。

さて、去る七月二十九日から数日間に亘り「つながる縁(えにし)心の輪」をテーマに「第三十一回全国総合文化祭(全国総文祭しまね〇七)」が地元松江で開催されました。ここでは、とても有意義なものでありました。そこで本号は、松江東高等学校より参加された先生方と生徒の皆さんの感想を掲載しております。

「文武両道」。それは、文と武にひた向きに努力し、人間的に一步でも成長した時に評価できるということでしょうか。

一つのことには賭けようとする姿は尊く、その美しさに周りの者は思わず応援したくなります。

高い壁にぶつかり、大きな波に巻き込まれることもあるでしょう。

挫折とつまずきは違います。ちよつとした勇気と努力で少しずつ自分の力で起き上がればいいのです。激動のこの時代、正面から向き合って歩み続けて欲しいと願ってやみませ

ん。最後になりましたが、会報発刊にあたり寄稿して戴きました皆様、誠に有難うございました。PTA会員の皆様並びに学校関係者の皆様、益々のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

広報部二年保護者 玉川 和子





〈表紙の絵〉杉谷 俊一（本校教員）

〈題 字〉

P T A会報 森脇 哲朗（旧本校教員）

高山 上田久美子（十三期生保護者）